



べふっ子の共育

～学校だより・つなぐ12月号 巻頭言として～

令和6年12月2日(月)

発行: 摂津市立別府小学校
校長 田中健一郎

11月19日(火)の「先生×保護者の対話の時間」では、保護者の方18名、地域の方2名にご参加いただきました。お忙しい中ご協力いただきまして本当にありがとうございました。

テーマは「先生と学校のことを話そう」。NPO法人COCONIの水木さんから現在の日本の学校と教職員の状況や課題を説明していただき、その後には学年グループに分かれて、教職員・保護者・地域の大人が「べふっ子たちのために自分たちには何ができるか」考えを出しあいました。

「今の落ち着かない状況、トラブルの多い学校生活が不安です。」私も一緒にお話を聞かせてもらいましたが、その中で率直な意見を話される保護者の方がたくさんいました。

「落ち着かない子が好き勝手やっていて、真面目に勉強したい子どもが教室に居にくくなったり損をしている状況はおかしい。」確かにその通りです。子どもたちが学習することを邪魔されたり、安全や安心が脅かされるのは間違っています。

保護者にとっては学校のことは子どもから聞くことでしかわからないことも多く、そして現在すべての子どもたちにとって落ち着いた学校生活にすることができていないことで、これだけ大人をも不安にさせてしまっている、と心苦しくあらためて責任を感じました。今年度掲げた「誰もが楽しく幸せに6年間を過ごせる別府小学校」というめざすべき目標からはまだまだかけ離れた状況であることをしっかり認識して、今後どのように取り組むべきかを具体的に考える必要性も強く感じます。

「落ち着かない子どもの保護者にきちんと現状が伝わっているのか。」話し合いの中でこのような質問もありました。もちろん学校からは保護者の方にもできる限り現状を伝えていきます。保護者が子どもに向き合ってもらうことはもちろん必要。人に迷惑がかかることをやめることについてはお家で話や指導もしていただくようにしています。しかし、そうやってもなかなか子どもたちの行動が変わらないこともあります。

「保護者の責任で強く指導するなど、どうにかしてもらわないと困る。」と言われることもしばしばです。しかし、誤解を恐れずに言えば、保護者が強い指導＝厳しく叱る、だけで子どもの問題は全て解決するのかというと、そうではないと感じています。他人に迷惑をかけることは絶対にやめるべきです。しかし、厳しく叱る言葉が子どもに響くものであるのならば良いですが、「次にやったらどうなるかわかっているのか」などの脅し文句や、「できなければ携帯を取り上げるからな」といった取り上げや制限の言葉だけで終わってしまったとしたら、本当に子どもが納得して行動を変えることにはつながらないと、これまで関わってきた子どもや保護者を振り返ってそう思います。

では、どうすれば子どもの行動を変えることができるのか。

我々もずっと悩んでいます。そして落ち着かない子どもの保護者の方も、周りの子どもたちの保護者の方も「どうしたら良いのだろうか」ととても悩まれています。みんな、どうにかしたい、安心したい、落ち着きたいと同じ気持ちでいます。

一つのヒントとなりそうなことが本に書いてありました。

イライラやモヤモヤをうまく伝えられない。助けてほしい。ものを投げたり蹴ったり暴れたり…。目の前の「困っている子」に必要なのは、大人が「あなたの不安をわかっている」と伝えることです。

『「ほんとのこと」は、親にはいえない 子どもの言葉を生み出す対話』(木村泰子著 家の光協会)という本からの抜粋です。養護教諭の福嶋先生から紹介された本。忙しくてなかなか読めずいましたが、この週末にページをめくりながら、なるほど我々大人に共通して足りないのはこの視点では。この視点を子どもたちのそばにいる我々教職員と保護者が同じように持つことができたなら、と思いながら読み進めました。

暴れたり叩いたりする子どもは迷惑をかける子、困った子。大人はよくそう言いますよね。

でも、「迷惑をかけよう」と思っている子なんて一人もいません。「困らせてやろう」と思っているのではなくて、その子自身が困っているんです。まわりの環境にとっても敏感に反応して生きてるから。まわりがそのことを理解すれば、その子は誰かを困らせないですみます。

子どもが困っているのは、なにかしらの不安を抱えているからです。でも、子どもの口から「不安」という言葉はあんまり出てきません。

「俺、安心やわ!」「これで安心できるわ」

子どもは「安心」という言葉はたくさん口に出します。

自分が不安を持っていることもわからないのが子ども。イライラやモヤモヤをうまく伝えられない、言葉にできない未熟な存在です。安心できないとき、どう発散するか。助けてほしい。友達を叩いたりしたくない。でもその方法がわからない。そんな時投げたり蹴ったり暴れたりする。

「助けてほしい」と率直に表現している。目の前の困っている子に必要なのは、大人が「あなたの不安をわかっている」と伝えることです。あなたはいい子だけれど、困っているからそんな行動に出ているんでしょ? 理解できたからその行動を変えていこうね。支えるから。(P32、33からの抜粋)

たくさんの保護者の方には是非読んでいただきたい本です。もちろん別府小の教職員にも。

本にもあるように、表現が未熟で不器用。それが子どもです。これまで自分が生きてきた家庭や育ちの中で体得した振る舞いや言動で表現してしまう。だからうまく伝わらなくて、怒られたりトラブルになってしまう。子どもたちの問題行動に対して、我々大人は叱責、指導という方法に目が行きがちですが、理解することこそが大切であるとあらためて考えさせられました。

ではどのように理解すればよいのか。同じ視点で理解をするためには?

そのためにも教職員、保護者、子どもたちのそばにいる大人同士が顔を合わせて話すことが大切だと思います。どちらが正しいという話ではなく、子どもたちにできることは何かという同じ目的を持った対話を続けていくことこそが必要だと思います。

19日の対話の時間では、保護者の方からの素直な思いをお聞きして、そして今学校で取り組んでいることや気持ちをお話する中で、「学校がどうにかして」「保護者がどうにかして」という視点から「何か自分たちにもできることはないだろうか」という視点に考えが変わっていくのを感じました。みんななんとかしたいのです。子どもたちには安心して落ち着いて毎日を過ごしてほしいのです。楽しく幸せになってほしいのです。

12月16日(月)15時30分~17時、「思春期の子どもとの接し方」~大人の知らない「子どもたちのホンネ」、知ることからはじめませんか?~というテーマで教育講演会を実施します。急遽計画しましたので日がない中でのお知らせで申し訳ございません。我々教職員も参加してお話を聞かせていただき、保護者の皆様と同じ視点を持って子どもたちの理解に努めていきたいと思えます。ご都合よろしければ多くの方のご参加をよろしくお願いいたします。

